



リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-5-1



「エスパッション、始動。」
(1985年作品)

(発掘整理一旦完了)
(最終稿+没原稿)

霧樹里守 is 土岐真扉
a s
遠野真谷人

目次

【 移転 の お知らせ 】	1
(エスパッション・シリーズ vol. 2.)	2
(1)	3
(2)	8
(3)	17
(4)	25
(5)	30
(没原稿)	
(没原稿)	35
(没原稿) (1)	36
(没原稿) (2)	42
(没原稿) (3) (1985.8.17.... 暑い～。頭が溶けた～～っ！)	44
(没原稿) (4)	46
(没原稿) (5)	49
『 (最初? の設定ノートより☆ 4) 』 (@小学3年～中学1年!?)	
(^◇^;)☆	51
『 (最初? の設定ノートより☆ 5) 』 (@小学3年～中学1年!?)	
(^◇^;)☆	55
奥付	
奥付	61

【 移転 の お知らせ 】

- ☆
- ☆ 超～大幅に？ 加筆&改稿中の2023年版、
- ☆
- ☆ こちらに移転しました。
- ☆
- ☆
- ☆ 『エスパッション・シリーズ』
- ☆
- ☆ ... エスパッション、始動！ ...
- ☆
- ☆
- ☆ <https://novelpia.jp/novel/1947>
- ☆
- ☆

=====

地球の旧暦（西暦）で言うと3500年代ぐらい（だっけ？）の御話です。隣接する2つの文明圏との衝突～統合に至る激動が始まる、ちょっと前。

ESPがまだ未公認だった時代の、歴史を動かした少女たちの、始まりのエピソード。

（発掘整理一旦完了）。

=====

(エスパッション・シリーズ vol. 2.)

エスパッション・シリーズ vol. 2.

エスパッション、始動

by 遠野真谷人

(1)

例によつての四人組。

《エスパッション》の最年長、サキ、レイ、ケイにエリーの古株メンバーが久し振りに顔をそろえた日の事だった。

「あら...ダージリンがないわ。セイロンでもよくって？ サキ。」

「ああ、うん。構わないよ。」

なにしろ恒星間移動基地であるエスパッション号自体が、乗員もろともリスタルラーナ全権大使のお供としてはるばるジースト星系まで行って帰ってきたばかりである。

二年近い異国暮らしが終わってまだ日も浅く、そのうえ戻ってからも各自いろいろと忙しく飛びまわっていたから...

さしも家政万能のエリーにして、お茶のストックを切らす、なんて事もたまにはあるらしい。

「あのばか（ティルニー）なんだって？」

レイが行儀悪く、長椅子の上で寝返りを打ってサキの読みさしのカセット（手紙）を覗き込む。

「ん...こないだの挨拶と、結婚式には是非来てくれってさ」

「はん。くっだらねー。」

「そうは言っても地球人とリスタルラーノにとっちゃ大切な儀式なんだから」

「ジーストでもオカネモチ（上流階級）は派手にかますがね」

「.....おたくねー。」

「なんか、レイってば、」

茶色い髪、茶色い瞳のケイが口を出す。

四人の中では年下で、ひとりだけ未だギムキョウイク（通信教育課程）を終えていないおかげで、お茶の時間に居間に出てきてまでレポート片手に課題に追われている可哀そうな少女なのだ。

「最近やけにサキになつくのね。」

ほとんど断定口調。

この間までは本気で衝突してばかりだったのに、と、云いたいところがほのみえる。

「...なつく!? からむの間違いだろ～～、わっ!!」

反射的にレイの手刀を避けつつサキが喚く。

「あら、違うわよ。それは“構っている”って言うんだわ」

コト、と上品にロイヤル・セイロン・ミルクティをさし出しながらエリーが結論づけた。

「仲が良くなるのは結構な事だけど。ジーストにいた間になにかあったの？」

二人とも後半数ヶ月は、あたくし達と別行動だったものね、と、きょんとしているサキと等分に見比べられて、鼻にシワを寄せたレイはぷいっと立ち上がった。

「.....別につ」

「...もう。ちょっとお待ちなさいったら。怒ることはないで.....あ!!」

「おっと!!」

遠方透視と未来予知に優れた二人がまず反応した。エリーとレイだ。

「女史だ！ 帰って来たぜ！」

「まあソリ・ソレイユ（ソレル女史）！ ニヶ月ぶりだわ！」

サキとケイが間髪いれずに駆け出す。

《エスパッション》の年少メンバー、いわゆる“子供たち”も幾人かまじえて、三分後には女史の専用艇《アションニ》（小鬼）号の接続ポイント（廊下）は祭騒ぎになっていた。

ソレル女史... リスタルラーナ星間連盟の誇る不世出の天才女性科学者、マリア，ソレル博士である。（マリア，の方が姓。）

“総合科学”という分野の創始者を自認し、細分化しすぎた各学会をたばね、ものした論文や実用案の特許は数千のオーダーにのぼる。

見かけは、プラチナ・ブロンドに薄水色の瞳の、いまだ三十代になるかならぬかという鋭い美貌の一女性に過ぎないのだが。...

“水の”とか“鉄壁の”と噂され、“連盟のメインコンピューター”とさえ呼ばれる人間が抱える無数の私設・公立研究施設のなかでも、

「お帰りなさいっ！」

と言って飛びつくように彼女を出迎える所は、ここ、極秘の研究施設《エスパッション》号以外にはないのだった。

冷静すぎて、はっきり云ってあまり人づきあい、というものの上手い性格ではない。

なにしろいまだに“帰って”くる度に、サキ達の熱烈な歓迎ぶりにうろたえてどう対応したらいいのか判らなくなる、という人だ。

もっとも、出迎える側は、それを見るのが楽しくてわざわざ派手に騒いでいるらしいきらいもあるのだが...

ひと息ついて。

「今度は何日くらいゆっくりしていただけますの？」

グリーン・アイス・レモンティを穏やかに給仕して、代表してエリーが尋ねる。

なにしろ相手はラプシレート（連盟総裁）なみの過密スケジュールだ。

「しばらくは下での仕事ばかりですよ。そう、ひと月はかかるかしら」

「やったっ！」

サキが嬉しげに叫ぶ。

「地球古代史のおもしろい史料、翻訳したんですよ。暇があったら...」

「それより例のESP探知機の試作が難航してるんです。力を貸して頂けません？」

ケイがあくまでも可愛らしくサキの科白を押しつける。

「その事なのですけれどね」

氷の浮かぶグラスを置いて女史は口を開いた。

「今日、〇七〇〇に保安局長と会うことになっています。した（首都惑星）で。」

「え、」

「じゃあ...いよいよ？」

「そう。エスパッション・プロジェクト（計画）発動ですよ。あなたがた四人とも、つい

ていらっしやい。」

エリーとケイが慌てて着替えに走った。

クラシックな趣味の華やかなドレスにごくさりげなく高価な宝飾品をつけてしまうのがエリーで、今日は落ちついたベージュ系と、瞳と同じ輝きのエメラルド。

ケイも髪と瞳にそろえた明るい茶色の清楚なワンピースを選んできて、リスタルラーノの少女らしく丸い耳たぶにピンクのラインを入れる。

「...ケイ。お化粧はまだ早くてよ」

「あん。このくらいみんなしてるってばあ」

髪の毛がうまくまとまらない、ドレスと靴の色が、と焦っているその隣で、いつもとまったく変わらないシャツとスラックス姿は、サキとレイだった。(※)

(※：このシーン、描いてくれる気があれば(リクエストしたいんですけど)サキは立ったまんま頭かかえて「あのねー★」という顔、レイはソファで顔にクッションのせてフテ寝。ソレル女史は煙草の山きずきながら座って時計を睨んでます。...)

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701112022494294/>

<http://85358.diarynote.jp/201701112022494294/>

2017年1月11日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201701112022494294/>

(2)

リスタルラーナ（星間連盟）のリスタルラーナ（首都惑星）。というと大抵の地球人は一瞬パニックを起こすが、驚くには当たらない。ラ行に聞こえる音がこの世界の言語には四種類もあるのである。

ついでに言うと首都惑星上の中心都市の名前も、リ（小）スタルラーナ、なのだ。

レイのあやつる六人乗りの小型艇でおり（大圏降下）て、シティポートに繋ぎ、まだ約束まではしばらく時間もある事だし、久し振りに揃って食事でもしましょうかと、街に出た。

オピニオン・リーダー（言いだしっぺ）たるサキと家政の長であるエリーが揃って地球人、ついでに出資者のソレル女史が大の地球びいきとくれば、リスタルラーナにありながらこのメンバーの食生活はどっぷり地球風、という事になる。

サキが案内して個室をとったのも、無論、ついこのごろダウントウンに開業したばかりの地球料理の店だった。

「これなあに？」

見慣れない白い四角い柔らかいものを試しながらケイが訊く。

組成が均一で、珍しくリスタルラーナの食物に近いと思ったのだ。

「ああ、ソーイ・ケーキ（豆の加工品）だよ。相当古くからある種類らしくってね。上古の文献にも時々出てくる」

一口に地球、といっても様々な文化があるうちで、この店の料理はわりにサキの故郷に近い地方のものらしい。

細長い二本の棒が出されて来て、**それ**で育ったサキと訓練済みのエリーは器用に棒をあやつって食べている。

もちろん他の人間にはそんな芸当は不可能だ。リスタルラーナ風にスプーンと縦長のナイフを使った。

マジックミラーの窓の外をショッピングにそぞろ歩く人々が流れて行く。

「……………あれ？」

サキは、ある **もの** に気づいた。

「おっ！」

レイが低くヒューっと口笛を鳴らす。

「行儀が悪くてよ、レイ。…どうしたの」

たしなめるエリーや、ケイや、ソレル女史に示された先には。

子供が数人、組んで万引きをしていた。

「…あら♪」

ケイが何故か、思わず喜んでしまったのも無理はない。

その連中は…ESPを、盗みに使っていたのだ。

見まもるうちにも向かいの店の前に美しく積まれたアンシスア（高級嗜好品）の山からパックひとつ唐突に消え失せる。

芯にあたる部分から巧妙に選んで抜くから、ワゴンごと派手に崩れ落ちるなどという事もなく、同じ超能力者でもなければ誰も、泥棒が居たとすら気づきはしないのだ。

見るからに薄汚れたかんじの子供達。

このコンピュートピアにあってそんな事はあり得ないのだが...

にも関わらずサキとレイは直感した。

この子たち、親も家もない、浮浪児だ。

たっ...

サキが席を立つ。

「追うよ、レイ。こっちはエリーとケイがいりゃ十分だろ」

「そうこなくっちゃ」

じゃ、失礼、とばかりに二人はさっさと駆け出して行く。

ソレル女史が首を傾げて呆れて言った。

「あのこ（娘）たち... 保安局長とのアポイントを何とってるんでしょうね」

店を出ながらエリザヴェッタが笑う。

「無理ですわ、女史。あの二人、特にサキにとっては“仲間”を見つけ出すほど大切な事はないんですもの」

時間通りに保安局本部に着くと、待つほどもなく直ぐに局長室へと通された。

上背のある落ち着いた服の男性が立って彼女達を出迎える。

連盟政府のかなめ（要）のひとり、保安局長マリア、コルディである。

「やあソリ・ソレル（ソレル女史）。久しぶりだな。で、どっちの顔としてきみを応待すればいいのかな？」

「近頃の犯罪天国を憂える一科学者として、いとこ（従兄）である保安局長氏に無理をお願いしに来ました、と言えは？」

「犯罪天国とは耳に痛い言葉だが...相変わらず、きみにプロポーズしている男としての立場は黙殺されているんだな」

言いながら素速く室内監視システムを切る。

それを見定めて、エスパッション号以外では滅多に表情を見せない女史が微笑した。

「五歳の時から一緒に育ったのに？」

「〜〜だがそっちの肩書きの方が、おねだりをしようという時には分がいいぞ」

「お兄さま。私情で動く人ですか、あなたが」

すうっと無表情に戻って眉を吊り上げる。

そう、この二人の公私の区別のつけ方と云ったらあまりにも見事で、これだけ親密でどちらもトップクラスの連盟の要人であるのにも関わらず、血縁関係にある事を知る者は殆どいないと言っていい。

「やれやれ。実際、ソリ・ラーダ（“氷の女史”）だよきみは」

あきらめたように肩をすくめて、局長は客人一行を応接用のスペースに誘導した。

「そちらの美しいお嬢さん方は？」

「わたくしの助手で、エレンヌ、ケイトと地球人のエリザヴェッタ・アリス・ドン・レニエータ＝グラス。」

エリーは本名で呼ばれるのは好きではない。普段はエリー・グラス、で通しているのだが。

「思い出した。エレンヌ大使夫妻の令嬢と、そちらは確か旧レニエート公国の第一公女殿下だったと思うが、」

さすがに保安局長の情報量もダテではない。

「...事情あって公位継承権は放棄いたしました。今は一留学生として女史の御指導を頂いております」

鮮やかに礼儀正しく応える。

「ケイは英才教育のために三歳からソレルがひきとって育てているとか。五年ほど前に一度会ったことがあるね」

「はい。その節はお世話になりました」

ピョコリ、と頭を下げる。

「...それで.....？」

局長は三人の希望通りにティレイカ（銀紫茶）の組成をインプットして待った。

すっ。

ソレル女史がメモリーパック（記憶回路）の束を取り出し、一番上のひとつを更を選び出してコルディ局長に手渡す。

「こちらの山の抜粋です。未だ不完全な段階ですが、わたくしのレポートが入っています」

「大した量だ」

彼が端末を呼び出して数式や実験報告に目を通していている間、しばらくは皆が静かにお茶を口にする、そのかすかな音だけが部屋に浮いていた。

「ふむ...」

常人の二倍くらいの速さでディスプレイ（画面）の文字に目を通し終えてしまうと、うなり声。

「なかなかおもしろ（興味深）そうな内容だが... よくは解らん。きみの言うこの“パワー”（力）、《エスパッション》とかは具体的にどういうものなんだ？精神力...？」

「それはあたくしから」

にっこり笑ってエリーが身を乗り出した。

三人で打ち合わせをするまでもなく手順はおのずと決まっている。

パタン！

保安局長のティレイカの容器、まだ三分の二ほど残っていたやつが突然かなりの勢いで斃れた。

もちろん飲み口にはストッパーが付いているからそれでこぼれ出すという事はないのだが。

ころころと転がる。テーブルのふちから落ちかかる。

と、思うと円筒は宙空にふわっと舞い上がっていた。

「..... ほう。」

勝手にダンスを始めた容器とエリザヴェッタを等分に見つめて局長はうなる。

((いやしかし新手の反重力システムだということも))

まず疑ってみるのが職分である。

「いくらソレル女史でもそんなビッグ・サイエンス（エネルギーのかかる研究）、個人の設備だけでは出来ませんわ、この御時世に」

リスタラーナ世界の深刻なエネルギー不足は、地球圏との交易でいくらか好転したとは云えまだまだ楽観視できるものではないのだ。

こうるさい動力源供給統制システムは一般の反感を買うところでもあり、連盟政府の頭痛の種となっている。

((...特A級スペシャリスト (科学者) ... 特権階級ともいえる“ソレル女史”の力をもつてしても、駄目かね))

口には出さず、局長はあらためて相手を注視しなおして問うた。

((無理です))

きっぱりした応答が、自分の思考と同じレベルの脳の内部でひびく。

奇妙な感覚だ。

「テレパシー (心話) か...」

読んだばかりの論文の単語を口にして局長は苦笑した。

「自由に相手の心が読める、という訳かね。そうだとしたら随分便利だろうが」

「いいえ！ 失礼いたしました。必要がない限り普段はこんな真似は... プライヴァシーの侵害になりますもの。エチケット違反ですわ」

「つまりは盗聴器と同じ、と？」

会話のあいだにもティレイカは容器から噴き出して銀紫の流れを描き、あたかも線細工の立体広告のように部屋中を走りまわっている。

くるくると彼の体を龍巻き状にとりまいて駆けあがったあと、思うさま暴れまわっていた液体は一滴も残さず、すうっともとの筒のなかへと納まって行った。

“魔法のようだ”と、もし地球人が見れば畏怖をもって表現しただろう。

しかしリスタルラーナにはそういった超自然的な概念がそもそも存在していない。

予備知識がないこと...それはつまり、余分な先入観を持たない、という事でもある。

そこが、狙い目。

「そうです。能力の是非はおくとして、機械と同じに使い次第で善悪の決まるものなのですわ」

きっぱり。言いきってみるのは一つの賭けだ。

「ふむ。...」

一旦は勝手に手のなかへ納まってきた容器が、しゅっという空気音とともにエリザヴェッタの側へ転移する。

保安局長としてもこれはどうやら本当にその”エスパッション”(超能力)なるものが存在しているらしいと、信じてみないわけにはいかなくなってしまった。

「...いいだろう。ソレル、きみの話を聞こうじゃないか」

腹をくくれば理解は速い。

「犯罪天国、なぞと罵られる原因になった近頃の難事件続き...きみらのこの能力と無関係ではないと踏んだが... どうだね？」

ニッ...

瞳を伏せて、満足げに、ソレル女史は薄く唇をつり上げた。

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません(<http://diarynote.jp/data/blogs/1/20170111/85>)

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701112152123531/>

<http://85358.diarynote.jp/201701112152123531/>

2017 年 1 月 11 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201701112152123531/>

(3)

子供達が狙うのは、食料品ばかりだ。

ひとりが透視して指示を出し、ひとりが“引き寄せ”て手にした袋まで呼び込む。

さらに他の何人かが交替で、何処かかなり遠くまでテレポートさせては、別の仲間を集めさせているらしい。

「...おーお。すっかりチーム・ワーク（集団行動）が板について...」

さりげなくメインストリート商店街の人コミ波にまぎれて後を尾けながら、誉めていいのか判らない口調でサキがぼやいた。

「一ヶ月や二ヶ月のキャリアじゃないなあれは。」

「リスタルラーナ（理想郷）にも浮浪児がいるたあね」

子供どころか大人の浮浪者や行き倒れのゴロゴロいる世界、ジースト（帝国）で育ったレイの感想は、また別だ。

((次、ティレイカ三パック。これで今日の“買い物”は最後よ))

透視を担当している女の子の精神浪が聴こえる。どうせ仲間にしかことば（心話）は通じないと思っているからなのか、遮蔽があまくて筒抜けの状態なのだ。

((あ、おい。ここの店は先週も狙ったぜ。あんまりしょっ中じゃバレちまうよ、向うの通りのにしよう))

リーダーを務めるらしい、“引き寄せ”系の男の子が皆を細い路地へと導いた。

表通りの華やかさとは裏腹な、殺風景な壁にはりついて店の内部の様子を探る。

((オーケー。))

三秒後には薄汚れた手提げ袋がポソッという音とともに軽くふくれている。

「おーし引き上げようぜ、みんな待って…」

ポン。

肩に手を置いたのは、サキだった。

「いけないなあ、そんな真似をしちゃ」

「！ な、なんだよっ!？」

別にテレポートして現われたわけではないので子供達もまさか“仲間”だとは気づかない。

「なんのことだよっ?!」

「これ。」

さっさとティレイカの箱を袋からさらいだす。

それでもまだ男の子は平気な顔をとりつくろおうとした。

((お、落ちつけよ。証拠がないもん。盗ったなんて誰にも言わせやしないぞ))

「でも、事実、お金は払ってないだろ？」

ついたまんまの店名入り万引き防止タグ。

「う… チキショウ！」

走って逃げようにも路地の反対側は、いつの間にかレイに押さえられていた。

子供達は袋のネズミだ。

((ラミル！ どうしよう？))

((こいつら補導員かな))

((バッチ持ってないよ))

((...心が読めない!))

((どうしてバレたんだろう。どうして？))

「落ち着けよ！」

ラミル、と呼ばれた男の子が怒鳴った。

「みんな、今からオレの言うことを直ぐに聞けよ。.....跳べ!!」

「おっっ!!」

瞬間、出遅れたレイが止める暇もなく子供達の姿は次々と掻き消えた。

ただし。

一拍おいてサキとレイに精神波をぶつけてから逃げようとした、ラミル自身をのぞいてだ。

「うわ」

咄嗟に攻撃をかわしながらサキが相手をホールドする。

「えっっ!? ... 跳べない!？」

((ラミル！ どうしたの))

((いいから早く逃げろ。早く！))

「はん。おまえアタマ（頭）としちゃなかなかデキるじゃないか」

薄く笑ってレイが言う。もっとも全ては一瞬のうちのことで、超能力者同士でもなければ何が起こったのかすら解りはしない。

「レイ。トレース（追跡）！」

ラミルをかかえたまま、サキ。

「あいよ、」

すぐに背を消す背の高い青い髪。

「え... あ？ おまえら!？」

「とにかく、これは、もとに戻すよ。」

しつこく手にしていたティレイカの箱がふっと、“跳ば”される。

ぎょっとして確かめてみるまでもない。

ラミルはそれがもとの店のなかの寸分変わらない場所に、何事もなかったかのように戻されたのを本能的に悟ったのだった。

「さてと、追うか」

頭のなかでレイの現在座標を捕捉して。

シュンッ。

テレポート・アウト！

「わうっ...ぷっ」

「ばーか。タイミングが悪かったねえ」

レイは平然としている。

場所は、どこかの廃墟のなか。おそらく旧市街の一部を占領した溜まり場なのだろう。

いるわいるわ、いずれも家出してから相当たっているらしい、ひどい服装の、ほとんど赤ン坊のままなのから、十歳前後のラミルくらいをかしらに、二十人ばかりの小さい子供達がうろうろ集まっている。

すっかり野生化してしまった、たくましい顔つきだ。

“買い出し”系の年長の子供達が泡喰って逃げかえる、そのすぐ後に、追って現われたレイを“敵”と受け取って、

「やっつけろ！」

その居合わせた全員がPKで石やらガラス壘やらを投げつける。

運悪くその瞬間にでくわしてしまったサキが咄嗟にとけ切れずにコンクリ塊を砕いて、飛び散った砂埃にむせてしまった、という次第だ。

「あ～～。人質とりやがった！」

「きったね～～!!」

「.....へっ!？」

驚いたのは、サキに連れて来られた“人質”の方だ。

「ラミル！早くこっちへ来いよ！」

「あ、おう。」

「いけえ、第二波！攻撃～～っ!!」

「わーっ。ちょっとタンマっっ！」

サキが悲鳴をあげるヒマもあらばこそ。頭にきている子供達は遠慮えしゃくなくそこら中の中のを投げつけて寄こす。

慌ててシールドを張って防戦する。

「やれるもんならやってみな！」

「レイ～～。おたくまた…」

ゴタを起こすのは彼女の特技だ。『話し合いで解決』が一応サキの主義なのだが。

「はん、こーゆう連中には口で言っても無駄なのサ。」

((こっちの力が上だと解りゃ、直ぐにあきらめて大人しくなる。))

そう云いおいて、タン！ と、一人すばやく反撃に移る。

「そっち五人まかせたぜ！」

「あのね～～。」

あっという間に超能力大戦争、の世界である。

「子供相手にどうやって戦えって?!」

「要は黙らせりゃァいいんだ！」

二対十五くらいの無茶苦茶な騒動だ。

石は飛ぶわ、ガラス片は飛ぶわ、子供達の攻撃法が初歩的なPKだけだからいいようなものの、それでも戦意も場慣れもないサキには、かわし切るのも一苦勞である。

レイの方は、かなわないと見たか数人がかりで手足にしがみついて噛みついて、人間団子になっている。

「え～いこの！」

つい面倒がって本気を出した。もともと相手がなんであろうと、“手加減” なぞというのはレイの流儀には無い。

「危な……っっ」

誰かが叫んだ。

はね飛ばされた子にさらに突き飛ばされて、乱闘騒ぎには加わっていなかった小さな女の子が高い場所から落ちかかる。

下には割れたガラス壇だ。

「どいてっ」

サキが地を蹴って飛び出した。

跳躍距離、五メートルはゆうにある。

子供を抱きとめて、転げこんで、受け身の要領で体勢をたてなおす。

「…ふ、ふええっ」

女の子がびっくりして安心して泣き出した。

「あ～御免。大丈夫？ …と、あた★」

よけた筈のガラス壇で二の腕がざっくり切れている。

かなりな血。

「…サキ！ こオの馬鹿が！」

“ガキども”を放り出してレイがいきなりテレポートをかける。

「PKで捕まえりゃ十分まにあうだろーが！ あんた一体、超能力者だってェ自覚が」

「…ありません。」

きっぱり言い切っておいて、叩かれた。

「て（痛）っ!!」

レイが手をかざすと血が停まり、傷口がすうーっとふさがる。

「応急処置だぜ。後でちゃんとエリーに診てもらっといた方がいい」

「ん。サンクス」

「...チャーラっ。大丈夫っ？」

「.....すご〜い。治しちゃったあ...！」

毒気を抜かれたてい（態）の子供達には、もう喧嘩を続けるつもりは無いようだった。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701121655467389/>

<http://85358.diarynote.jp/201701121655467389/>

2017 年 1 月 12 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201701121655467389/>

(4)

「.....成程。」

保安局長は黙ってしばらく考えている。

ソレル女史とエリーの熱弁。目の前に絶世の美女が揃っているというだけでも、並の男なら何でも言うことをきく気分になっているところだ。

「つまり、きみ達の主張を信じるなら最近おくら（迷宮）入りした難事件のほとんどは、きみ達と同じ特殊な能力を持った人間が引き起こしたもので、.....その解決に無報酬で協力したい、と。」

加えてその美女達には人並はずれた知能がくっついているのだから始末が悪い。

「こちらに要求するのは保安局秘密部員としての肩書と捜査権のみ、費用そのほか一切はソレルが負担する...か？ 一体なにを考えているんだ。この条件では、そっちのメリットが無い。」

「ですから、捕まえた犯人は必ずしも引き渡さない、と」

「きみ達の云う“仲間の保護”か。甘いな。それだけが目的なら何もわたしの力は要らない筈だ。現に我々はそんな種類のパワー（力）の存在すら知らなかったのだから、勝手に行って、常人の目には映らない領域で自由に犯人を挙げてくればいい」

その、パワー（力）の存在を“知らせる”こと自体が目的なのだとは、まさか門外漢の彼には知る由もない。

「何を考えている...ソレル？」

「...別に、なにも。」

ソリ・ラーダ（“氷の女史”）とまで異名をとる彼女の、鉄壁のポーカー・フェイスである。

「そちらの損になる話でもないと思いますが」

「ふむ。...」

そしてまた局長は背もたれによりかかる。

「しばらく、考えさせて貰おう。実験報告にも一度きちんと目を通さねばなるまいし...

しかしな、ソレル」

「はい？」

「この話、応じるとしても最低で捜査実費くらいはこちらで持たせて貰う。で、なければ。」

「...ひもつき、ですか。もちろん報告の義務も出てくるのでしょうか？」

一瞬、従兄妹同士が睨みあう。

折れたのは、ソレル女史のほうだった。

「ま、.....いいでしょう。」

もともとそういった用心深さはこの二人に共通のもの、いやむしろコルディ局長の方から若き日のソレル女史に、積極的に叩きこまれたものであったのだから。

それを汐に、面会は終わった。

「あ。局長、」

立ち去りしなに大人しくしていたケイがついと振り向いて口を開く。

「なんだね。前のように呼び捨てにしてくれて構わないだよ、ケイ。」

リスタルラーナでは最も一般的な茶色い瞳の、笑顔の愛くるしい少女だから、たいていの大人に彼女は好かれる。

小首をかしげて、

「もう子供じゃありませんのよ、コルディ小父さま。...近いうちに医者にかかる予定って、おありじゃありません？」

「...今日の夕方にチェックを受けるつもりでいるが...それが、どうして？」

「うふ。...ついでに二～三日、入院される準備をしておかれた方がいいですよ。肝臓に中期のレシファ型浮腫ができてます。...手術が必要ですわ」

ソレル女史が眉をひそめる。

「...コルディ...定期健診はどうしたんです。中期にはいるまで放っておくなんて」

「.....忙しくてね。」

「お大事に。」

最後にエリザヴェッタの極上の笑みを残して、三人の姿はドアの向うに消えた。

「.....“微細透視”ね...ケイもだとは！」

どさりとソファに身を沈めてビジフォンのスイッチを入れる。

「君か？ 済まんが明日から三日間のスケジュールはすべてキャンセルしておいてくれたまえ。...そう。急用ができるらしくってね」

...もはや《エスパッション》を疑うだけの気力は、彼には残っていないのだった。

「...じゃあ、あたし達を引きとって面倒を見てくれるのね」

「学校にも行かしてくれる？」

子供達はサキをとり囲んで話を聞いていた。

「学校、はね、通信制になるんだ。そら（宇宙）にある基地だから」

「その方がいいわ。今さら小さい子たちと一緒にのクラスになるのも嫌なもの」

「おい...ちょっと待てよ」

「何？」

不機嫌なのはラミルだ。

「わざわざそんな大金かけてオレら引きとって、で、どうしようってつもりだよ」

「別に。用心深いね」

サキは笑った。

「なにかに利用しようって気はないし、信じられなきゃ無理に来なくてもいいよ。わたしらとしちゃ...人並みの教育、受けてもらって、エスパッション（超能力）の訓練して... そうだな、目的っていや、頭数をそろえたいから、って事くらいかな」

「頭数？」

「そ。なんにしろ、物事には人数が多い方が説得力があるからね。いずれ我々の存在を公表して世間に受け容れて貰うためには、ね。」

それが最終目標なのである。

子供達どうしてそれからモメにモメて、やがてレイが一喝しておさまった。

「あー畜生うるせえっ！ 来たくなけりゃ来なくていいんだぜっ！」

「……………行く。」

浮浪児の集団。

もともとそういった所で、レイ（彼女）は育ったのだ。

「オーケー。話をついたじゃないか。で、どうするんだサキ？」

「…ん～～。ひとまず女史のセカンドハウスまで連れて行こう。お風呂が必要だよこの子たち★」

「お風呂！ なつかしい言葉だわ！」

女の子達がまっさきに歓声をあげる。

ひとり行水嫌いのジースト人だけが鼻にしわを寄せていた。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701121729114585/>

<http://85358.diarynote.jp/201701121729114585/>

2017年1月12日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

(5)

三日かぎりの入院の快気祝いをやろう、とコルディ自らに強引に食事に誘われて、ぶつぶつ言いながら珍しくビジネススーツ以外の服で氷のソレル女史は出掛けて行った後だった。

「あら、サキ。お帰りなさい」

留守番はエリーとケイだ。

「増築資材の発注しておいたわ。あ、と、サキの設計、少しつけ加えたんだけど」

ケイが言う。

「あれ？ 何処か見落としあったっけ？」

「べ〜つに。ただ女の子の部屋にはバスルームに等身大の鏡つけて、化粧棚置いただけ」

「あなた方に任せておくと完全に実用一点張りになってしまうんですね」

「……………あはは☆」

サキとしては笑って誤魔化すしかない。

「で、“下”の子たちは上手くやっています？」

「元気に合宿してるよ。レイがしばらくあっちに残るってさ。早速ESPの訓練はじめてた」

まあ可哀想に、とエリーが同情の声をあげる。

スパルタ式のレイの情け容赦ないしごき方は三年前、《エスパッション》に初めてやって来た頃に経験済みだ。

「いや、あいつ小さい子供の扱いは結構うまいから…」

「え～～ウソォ！」と、ケイ。

「ほんとだよ。わたしもジーストで初め見た時には驚いたんだけど、何ていうか近所のお兄さん、て感じになっちゃってさ」

「…お姉さん？」

「いや。お兄さん。」

「……………なるほど。」

ぷくっ、とエリーが吹き出した。

「想像つくわね。じゃ、ケイ。レポートのきりがいいようならお茶にしあmしょうか。タルトが焼ける頃だわ」

「はあい♪」

ティルルルン。

呼び出し音が鳴ってビジフォンの画面が明るくなる。

直通の解除コードナンバーを知っている人間、レイだ。

「あれ、」

「ヘイ！今、女史がこっちに来てるんだがね」

「え、食事しに行ったにしちゃ早すぎないか？」

「コルディ氏に四度目だかのプロポーズされて、機嫌が悪い。」

「あらま」

「何はともあれエスパッション・プロジェクト（計画）始動だぜ。OKとれたってさ。」

「...いやったっ!!」

じゃ、な。と用件だけ言うなりニヤッと親指をたてて笑って、また一方的に映像は消える。

「よかったこと。これで動き出せるわね」

エリーが茶器のお盆をテーブルに置いて頬笑んだ。

エスパッション（超能力者）。勝負はこれからなのだ。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701121743376864/>

<http://85358.diarynote.jp/201701121743376864/>

2017 年 1 月 12 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201701121743376864/>

(没原稿)

(没原稿)

(没原稿)

(没原稿) (1)

リスタルラーナ（星間連盟）のリスタルラーナ（首都惑星）。というと大抵の地球人は一瞬パニックを起こすが、驚くには当たらない。ラ行に聞こえる音がこの世界の言語には四種類もあるのだ。

ついでに言うと首都惑星上の中心都市の名前も、「リ」（小）スタルラーナ、である。...

レイのあやつる六人乗りの小型シャトルをシティポートに繋ぎ、まだ約束まではしばらく間がある事とて、久し振りに揃って食事でもしましょうかと、街に出た。

ステラード通り。

古めかしい趣味の歩行者天国が特徴の、都市公園内部にある最高級のショッピング・モール（街）である。

ちょうど祝日にあたって楽しげな上品な人々で通りはにぎわっていた。

「！」

サキは、あるものに気づいた。

「おっ！」

レイがヒューっと低く口笛を鳴らす。

「行儀が悪くてよ、レイ。...どうしたの。」

たしなめるエリーや、ケイや、ソレル女史が示された先には。

子供が数人、組んで万引きをしていた。

「...あら ♪」

ケイが思わず喜んだのも無理はない。

確かにここしばらく「リ（小）スタルラーナ」で児童の（悪意のない）犯罪が社会問題になってはいた。

餓えの心配等とは縁のない富んだ社会では、かえってスリルを求めて、“してはいけないこと”が流行るものなのだ。

けれど、その子供達は違っていた。

明らかに親から構って貰っていない薄汚れた服装。

そしてESPを、盗みに使っていたのだ。...

「レイ。」

声をかけて、すいっとサキが歩きだす。パキッと指を鳴らして。

「フフン」

相棒は余裕たっぷりに後を追った。

一行が見守るうちにも一軒の店頭に美々しく積まれたアンシスア（高級嗜好品）の山からバックがひとつ唐突に消え失せる。芯にあたる部分から巧妙に選んで抜くから、ワゴンごと派手に崩れ落ちるなどという事もなく、誰も盗みかはたらかれたとすら気づきはしないのだ。

「へへっ」

その子...ラミルは得意になってふくらんだ上着の前を押さえた。

と...

「いけないなあ、そんな真似をしちゃ」

肩越しにやわらかい手が伸びてせっかくの箱をさらい出す。

「！ な、なんだよっ!？」

立っていたのはいたずらっぽく笑っている灰色の髪の人だ。

ラミルは慌てて平気な顔をしようとした。

((お、落ちつけよ。証拠がないもん。盗ったなんて誰にも言わせやしないぞ))

「でも、事実、お金は払ってないだろ？」

灰色の髪の人はいくすと笑う。

サキは云う。

頬を赤くして、咄嗟にラミルは逃げ出した。

つもりだった。

「!? ...!!」

テレポートが、利かない。

((ラミル?! どうしたの))

テレサか誰かの“声”が脳裏に響く。

((...逃げろ！ 早く！ 何だか判んないけど...))

号令一下、あたりの路地や屋根の上から次々に仲間の気配が消えた。

「はん。おまえアタマ（頭）としちゃんかなかデキるじゃないか」

転動を封じていたレイがすいと歩みよって退路をふさぐ。

「う...」

判んないけど、これは、とにかくえらいピンチだ。

「とにかく、これは、もとに戻すよ。」

サキが持て遊んでいた手の上から、アンシスアの箱が消えた。

ぎょっとして確かめてみるまでもない。

ラミルは、それが元の山の中の元の場所に、寸分変わらない状態で戻された事を悟ったのだった。

「...あ、あんた達...!？」

「おなか空いてるんだろ。一緒にお昼はどう？」

すっきり笑われて、ラミルは何も訊けなくなってしまった。

オピニオン・リーダー（言いだしっぺ）たるサキと家政の長であるエリーが揃って地球人、ついでに出資者のソレル女史が大の地球びいきとくれば、リスタルラーナにありながらこのメンバーの食生活はどっぷり地球風、という事になる。

「...なんだよー、これ...」

引きづってこられたラミルは渡されたものをぐちゃぐちゃとつついてみた。

組成に均一性がない。白い四角い柔らかいものと茶色い細かい粒、それに赤っぽい知るが不完全に混ざりあっている。

手描きらしい模様の丸い皿のなかで。

無気味に原始的そうなシロモノである。

「...喰えんのかよ」

「まあ食べてみなさいって、美味しいから」

リスタルラーノであるケイが舌鼓を打って言う。

彼女だって慣れるまでにはだいぶ抵抗を示したのだが。

ここはつい最近ステラード通りに開業した地球料理の店だった。

一口に地球といっても様々な文化があるうちで、比較的わりにサキの故郷に近い地域のものらしい。

細長い二本の棒が料理とともに出されて来て、それで育ったサキと訓練済みのエリーは器用に棒で食物をすくって口に運びはじめた。

無論、他の人間にはそんな器用な真似は不可能である。

リスタルラーナ風にスプーンと縦長のナイフ（刃物）を使う。

「……名前は？ 齢いくつ？」

店長と顔なじみのサキが個室をとったので、多少つつこんだ話になっても平気なのだ。

仕方なく呑みこみながら、サキに訊かれたラミルはぎろっと睨み返した。

((誰が答えるもんか))

くすっ、とエリーが嘆息を洩らす。

「オリン、ラミルくん、十二歳。柄は小さいけど、みんなのリーダーなのよね」

「え…」

見かけは八歳ほどでしかない少年は呆然として碧の瞳をみつめかえす。

「まずシールド（遮蔽）の仕方から訓練しなおいさなきゃ」

ケイが言う。

「筒抜けだわ」

ラミルは黙って最後の一口をすすりこんだ。

おもむろに匙を置く。

そして、

しゅうっ、と、空気音を残して、その体は掻き消えていた。

二ッ。

笑って、サキは口元を拭くなりドアに向かう。

「追うよ、レイ。こっちはエリーとケイがいりゃ十分だろ」

「そうこなくっちゃ」

じゃ、失礼、とばかりに二人はさっさと駆け出していく。

ソレル女史が呟いた。

「あのこたち...保安局長とのアポイントを何とってるんでしょうね」

(没原稿) (2)

「“人類の転換期”ね... 地球やジーストには、昔からこういった能力が存在したと？」

頭のなかでレポートにあった数値を確認しながら彼は云う。

ソレル女史が答える。

「あくまでも仮説にすぎませんが、大規模な戦争被害による文明の後退、といった事件がリスタルラーナの歴史にはありませんでしたから。種族としての年齢はむしろ最も若いと云えるのかも知れません」

「やれやれ...」

一旦は勝手に手のなかに納まってきた容器が、しゅっという空気音とともにエリザヴェッタの側へ移動するのを見てしまうと、さすがに保安局長もこれが機械仕掛けによる現象ではなさそうだと、認めてみないわけには行かなくなった。

「以前から何か妙な研究を手がけているのは知っていたが...まさかこんなに不可解なシロモノだとはね、ソレル。きみもこの類の能力が...？」

「多少は。自分の属性の分析からはじまった研究でしたからね。」

「成程。」

実験台に使われたティレイカを薄気味悪そうに眺めて、新しいものを呼びだして彼は一息ついた。

「.....で？ わたしに何を頼みたいって？」

「保安局の秘密部隊員としての承認を...活動を保護して貰いたいです」

(没原稿) (3) (1985.8.17....暑い～。頭が溶けた～
～っっ！)

((...早まったかなァ... ?))

((はん。))

サキは、少しばかり、後悔していた。

咄嗟にとびだしてはきたものの、テレポート先のトレース（追跡）だけしておいて局長との話がついてから来てもいいし、でなけりゃレイひとりを先行させておくんでも、よかったのだ。

((まあ、女史の方はエリーとケイがついてりゃ大丈夫とは思うけれど...))

夢中になるとあとさき考えないのは欠点だな、とか自己反省したりして。

本来、デモンストレーターとしての役はサキとレイのものだった筈なのである。

((はん。))

軽く言い捨てて、レイの方はためらいもなく先を歩いていた。

り（小）スタルラーナの北西、だいぶ離れた所。

連盟の首都惑星に限って、“旧市街”というのは主都市の中心部分をさす言葉ではないのだった。

なにしろ連盟最古の惑星、リスタルラーノ（人類）発生之地である。

大昔から首都周辺の自然環境が劣化するたびに国民ぐるみの遷都を行ない、という風

だったから、今でも広大な砂漠地帯のなかに点々と、線上市らなって都市の残骸を見ることができる。

人類は母星を破壊しながら発展してきたわけだ。

その、放棄されたなかでは最も新しい廃墟

それが、現在“旧市街”と呼ばれている土地だった。

(没原稿) (4)

逃げたラミルの気配を追いかけて、方向を探りつつ地道に公共機関を乗り継いで...

あたりはいつの間にかうらさびた旧市街区である。

「やっぱりね。」

サキが言う。

「...もうちょい左...かな」

触手を伸ばしているレイが言う。

こちらもテレポートして捕まえた方が話ははやいのだが、相手は子供だし、あまり驚かせたくない、と主張したのはサキの方である。

「居た！」

薄汚れたかんじの子供が一人、どうやらこれは偵察に出されていたらしく、さっと“跳んで”逃げる。

「おお、A級の二人目がいたぜ。収穫！」

長いコンパス（脚）で走ると、まだ斥候が報告しているひまに溜まり場のまんなかへと、飛びこんでしまった。

いるわいるわ、いずれも家出してから相当たっているのだろうひどい服装の、ほとんど赤ん坊のままのからラミルの年齢をかしらに、二十人ばかりの小さい子供達がうろうろあつまっている。

すっかり野生化してしまった表情だ。

これだけ“仲間”のいる本拠地でなら負ける心配は無いと踏んだのか、今度はラミルも避難命令を出すつもりはないらしかった。

「...この超近代的なリスタルラーナ・シティに浮浪児、ねェ。ま、いいけど...

よくもまあ逃げ切れたもんだな」

サキの科白に呼応して、ぷつぷつと泡のような感情がシールドの不完全なまわり中から湧きあがった。

((大人なんてだますの簡単だもん... 不器用でさ))

((どーせ探してないや。ボクのこと、気持ち悪いって... 出て行って叩き出したんだから))

((死んじゃったの... ごめんね。あたし、殺す気はなかったのよ... ごめんね。))

と、こういった所だ。

「やれやれ」

サキとしては苦々しく嗤うしか手はない。

どれもお慣染みの... どのみち、理解のない時代に超能力者として生まれてしまった子供のたどるパターン(道筋)などに、そうそう種類があるわけもないのだし。

かたわらの何か大きな空き箱をひき寄せて腰を据える。

「おい！ 俺たちに何の用だよ！」

ラミルがたまりかねて怒鳴る。

再びレイに、今度は仲間ぐるみテレポートを封じられてしまったのに気づいて、イラついているのだ。頭にきたらしい。

「まあ聞いてよ。わたしらはあなた達の“仲間”だ。そしてね... あるプロジェクト（計画）を持ってる」

今ごろエリー達が説明しているのはあくまでも建前。

そして、...サキが話そうとしているのは、本音、なのだった。

(没原稿) (5)

「...じゃ、なんだよ。俺たちの他にもこういうの、いるわけ。」

「うん。現にここにわたしとレイがいるだろ？ それにあと3人、ラミルはさっき会ってる筈だ。その他にもわたしが知ってるだけでも結構いるよ。」

...みんなあんまり...幸せでない人が多いけどね。

十人ばかり、おたくらと同じくらいの年頃の子が、わたしらと一緒に暮らしてる。」

「ジーストにもいるんでしょ？ 地球にも？」

「うん。」

子供達はざわめきながらサキの話に耳を傾けていた。

長いあいだ肩を寄せあって生きてきた結果、みんなひとまとめで一人、というような気分になっているらしい。テレパシーの遮蔽が甘いのもそのせいだ。

ジースト星間帝国には全人口の三分の一程を占める種族としての超能力者がいて、なんとかして被差別階級から脱しようと階級闘争の苦勞を重ねていること。

地球では古くから、数は少ないけれども“神”とか“魔法使い”等と呼ばれ、そのたどった道は様々であること。

...そういった事を、なるべく解り易くサキは説明したつもりだった。

「ねえ、どうして？ あたし達みたいのが生まれたの」

「...進化の過程...かな。正直ってわたしにもよく判らない」

「じゃ、ふつうの大人はサルみたいなので、僕たちは人間なんだ！」

ふっとサキの瞳が困惑したように曇る。

レイは、気がついたが、助け船は出そうとしなかった。

「...ん～～、そういうのじゃないと思うよ。」

つまり、普通の人達は我々の親で、わたしらはきっとその子供なんだ。」

『 (最初? の設定ノートより☆ 4) 』 (@小学3
年～中学1年!?) (^◇^;) ☆

<http://76519.diarynote.jp/200612220027470000/>

2006年12月20日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5 [http://76519.
diarynote.jp/200612220027470000/](http://76519.diarynote.jp/200612220027470000/)

第一部

第1章

記録はすでに山となりデスクの片すみに積まれていた。

それをながめて長官は深いため息をついた。

「長官、お呼びですか？」自動ドアがすっと開くとソレル女史がそこに立っていた。

「これを読んでくれたまえ」

長官はつかれきった声で言った。

ソレル女史はすべての悪事の記ろくである書るいをうさんくさそうにながめた。「今までの事件よりはるかに大規模ですね」

「とにかくすわりたまえ……今日、呼び出したのはパトロール隊の事なんだが。君も知っての通りこの一年というものありとあらゆる事件が跡を絶たない。そこでだ、今度、銀河連盟では、宇宙パトロール隊を決成することになったのだ……。」

「知っています。」ソレル女史が静かに言った。「その案は私(わたくし)が出したのです。けれど長官、今、われわれの必要としているものは**ただのパトロール隊ではありません！**」

「ただのパトロール隊ではない？」長官はいぶかしげにたずねた。

「そうです。超能力者のグループです。なぜなら1年間で事件がこんなに爆発的にふえたということは裏になにか組織めいたものがあると思ってよいでしょう。それはおそらく銀河連盟以外の未知の惑星あるいは組織だと思われます。彼らは……」

ソレル女史がことばを切ったとたんクラス長官はもう反撃を開始した。

「ちょっと待ちたまえ。その考えはちょっと飛やくしすぎだと思わんかね。確かにわが銀河系には生物の発生が十分考えられる惑星はいくつもある。しかしそれならばどうして彼らは今まで攻撃を加えてこなかったのだ？ それに“彼ら”がわれわれと同じ、もしくはそれ以上の能力を持った生物だとすると年代的にぐう然すぎる。それから君は超能力者と言ったが冷静であるべき科学者に似つかわしくない夢物語だ。地球の神話の類（たぐい）だろう。われわれは今それどころではないんだ。存在しないものに希望をかけることはできないのだよ」

「そうですか……？」ソレル女史はいたずらっぽい笑みを浮かべて静かに言ったがその声のひびきにただならぬものがあるのを長官は感じた。

「うわっ！」次の瞬間、長官の体を持ちあげた力があつた。

そのまま彼の姿は空中にとどまった。

「ど、どういうことなんだ!? おい！ ソレル君！」

「長官がお信じにならなかった超能力の中の念動力（サイコキネシス）です。私（わたし）の案に賛成していただけますね？」

「と、とにかくおろしてくれ。サイがどうしたって？ ふう……」

「念動力（サイコキネシス）です。文字通り、念じただけで物体を動かす力です。長官がなっとくなくさるまでいくらでもごらんに入れます。……サキ！」

空間の1点ににぎりができたと思うとあっというまに人物像が表われた。見るとまだ20歳（はたち）前の髪の長い女性だ。

「私の護衛のサキ・ランです。」それはたしかにソレル女史の声だった。しかしその直後に聞こえた声はちがった。

『サキ・ランです。よろしく。長官はテレポートをご存じですか？』

「なんだって？ いったいだれがしゃべっているんだ!？」

『私（わたし）です。心から心へ話しかける、つまりテレパシーです。これも超能力といわれるものの1種です。』

「じゃあ、君は、その……つまり……超能力者か？」

『そうです。私のほかにあと2人います。長官さえ承知していただければ、隊はすぐにも決成できます。』……ここで初めてサキは口を開いた。

「おねがいです。長官」

「ウム……」2人は息をのんで待った。

「よし、わかった。ソレル君、君にすべてをまかせよう。がんばってくれたまえ」

「はい……！ ありがとうございます」同時に2人の姿はかき消すようになくなった。長官はつぶやいた。

「テレポート……だな？」そしてにが笑いをした。



コメント

<http://76519.diarynote.jp/>

りす

2006年12月22日 0:53

誓って証言いたしますが、この時点での私が、『宇宙少年ロビン』とか『サイボーグ009』とか『科学忍者隊ガッチャマン』とか『サンダーバード』とか『超能力少年バビル2世』とか『チャーリーズ・エンジェル』とか『バイオニック・ジェミー』とか、美内すずえとか竹宮恵子とかとかとか.....の影響を、多大に受けていることは、間違いありません。

しかしながら、これだけは主張いたしたいのですが、
私が『超人ロック』という作品に出会うのは.....

私が『エスパッション・シリーズ』の原型をほぼ完成した、
後の、中学2年の時、だったと思うんですよ.....確か。

(たぶん「最後の蒲田コミケ」に、萩尾望都ファンクラブの
クラスメイトにくっついて行った時に、同人誌の初版本の
『超人ロック』を入手。おそらく、初期設定が考案された
時期はと言えば、私がESPの妄想を練り上げていた頃と、
ほぼ同時期なのだろうと推察されます.....☆)

.....「偶然の一致」？

それとも.....

「同時性 (シンクロニシティ)」..... ? (◇;)??

『 (最初? の設定ノートより☆ 5) 』 (@小学3
年～中学1年!?) (^◇^;) ☆

<http://76519.diarynote.jp/200612220107100000/>

2006 年 12 月 21 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5 <http://76519.diarynote.jp/200612220107100000/>



エスパッション号のコンピュータールームでは2人の少女が仕事を続けていた。そこへ2つのかけがあらわれ、またたくまにソレル女史とサキの姿になった。

「あら！ おかえりなさいパトロン。おかえりサキ。クラス長官はなんていってましたか？」

「大丈夫、賛成してくれました。それよりあながたの方はどうレイ？ 有能な超能力者がどれくらいいるかしら？」

「ばっちりです。ケイの作った超能力反応装置はすごいんだから。ねえケイ！」ケイと呼ばれた少女はちょっとはずかしそうに笑って言った。

「今 キャンベラ大陸を調査中です。今までの反応はケリー半島のイベリア国カシミール市（シティ）あたりに1つ、ディスカーナ大陸のソウリィ国リディア農業地域あたりに1つ、かなり強い反応がありました。それとあまり強くないんですけどディーノ島のラヴァ市（シティ）に1つ.....あっそれからエスパッション号内部で反応があったけど、これは私たちだと思います。」

「そう。じゃあジースト星と地球への発送準備は私たちがやるから、あなた方は記録を続けてちょうだい。サキ、手伝って」

「はい」



調査の結果、特に強力と思われる超能力者は、リスタルラーナ星にはシシリィ・カーク、ビスタ・バタケット、レニオン・シーザの3人。ジースト星にはトリーニ・ユウ、コー

ナ・フレークスの2人、地球にはマリーネ・ノザキと、エリザヴェッタ・アリス・ドン・レニエータの2人がいることが判明した。

「合計7人。これじゃ、あなた方全員にとびまわってもらわなくちゃなりませんね。」

「ふえ～～。パトロンひと休みしましょうよ」

「なにいつてるんですか。サキ、あなたは地球へ行ってちょうだい。レイはジースト星へ、ケイはここに残ってね。調査期間は1週間。時間の余った人は休かにしていいわ。パスポートはクラス長官に頼んでおきます。」

「わお、行ってきまアす」

「サキったら！」レイがさげんだ「地球までいっきにテレポートしようなんて考えないでよ。あなたってば自信過じょうなんだから」

「あなた方にはワープ客船を使ってもらいます。出発は今日の20時30分、1週間後に折り返しでもどってくるからそれに乗ってね。」

「あらやだわ、あと30分しかないじゃない。サキも荷作り急いだ方がいいわよ」レイはそう言うと自分の個室へ飛びこんで行った。

「荷作り!? あたしそんなもの苦手ちゅうの苦手。ケイいっしょに見てくれる？」

間もなく3人はそれぞれの部屋レイは殺風景なほどさっぱりした、サキは荷作りでめちゃくちゃになった、ケイは少女趣味にかざりたてたお城を後にリスタルラーナへ向かう宇宙タクシーを拾った。

「ねえケイ。なんだってこんな大きな荷物になったの？」サキが言った

「ごめんなさい。だけど最低限必要なものだけよ。お金とパスポートとねまきとタオルと超能力者メモと薬を少しと着がえを6組と……」

「着がえが6組もいるもんですか、たかだか1週間！それに薬なんて！」

「やめなさいよサキ。ケイに荷作り頼んだのはだれでしたっけねえ？」

「お客さん。そろそろ宇宙空港に着きますよ」

サキとレイがワープ客船に乗りこんだのは発進10分前だった。



ベルト着用のランプが消えるとサキはあらためて窓の外を見た。

何度見ても見あきることのない光景だった。黒い空間とついでに後にしたリスタルラーナ星の緑の輝きがおどろくほど調和し、そのむこうにはリスタルラーナの太陽、デネブが青白い光を放っている。

サキは宇宙は6度めだったが思わず感嘆のため息をついた。

やがてリスタルラーナ星の光が消えかかるところ、ワープに入る。

距離は1500光年、時間にして数秒、再びベルト着用のランプがついた。

「これよりワープを行います。お客様はベルトをしめ、座席によりかかって下さい。

秒読み開始。10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、0！」

サキはエレベーターに乗ったようにすと体が浮くのを感じた。

目の前がぼーっと暗くなり、どこかで女の子が「ママ！」と呼ぶのが聞こえた………………。はっと気がつくと船内はざわめきを取り戻していた。

『困ったな。ワープするたびにこうぼんやりしていたんじゃ宇宙では手も足も出ない。なんとかしなくちゃ……』

その時、客席の片すみで、地球だ！ の声があがった。

リスタルラーナの緑とはまた違った美しさを持つ蒼い地球は、すでにその姿を大きくのぞかせている。

地球人はもちろん、リスタルラーナ人もジースト人もそれを見つめた。中には、リスタルラーナと地球の美しさを競って口論を始めた者もいる。

宇宙船はバン・アレン帯を通過し大気けんに突入した。

窓は熱に強いジースト産の垂けい砂性クリスタルなので、

とざされはしなかったが、断熱性はないので船内の温度は少しずつ上り始めた。窓の外には紅の炎が流れている。気温は 30℃ をこえた。冷静で事務的なアナウンスが聞こえた。

「本船ではただ今、冷房をフルに活用してしております。もうしばらくのごしんぼうを願います。放射熱をさけたい方は右手の黒いボタンを押して下さい」

重力コントロール装置が発明されている現在では、ものすごい加速度も無重力もまったく気にする必要がなかった。そしてジーストの真夏よりははるかに楽な大気けん突破が終わると宇宙客船は水より数倍も比熱の大きい特しゅ冷きゃく用水の底にほてる体をしずめた。

数分後、サキは半年ぶりに地球の土を踏み、地球の空気をすいながら日本へ帰りたと思った。南極であろうとサハラ砂漠であろうと、ここアメリカ NASA の宇宙空港であろうと地球にはかわりなかった。なつかしい地球。しかし日本にはわが家と家族が待っていた。幼いころ近所の子とけんかするたびに、おまえは優れているのだとかぼってくれた母。だれよりもサキに似て超能力の素質のある父。10才近くも離れていて、めったにけんかをしたこともない弟。けれどサキの頭にはさっきから同じ言葉がひびいていた。

『時間の余った人は休かにしていいわ』

そう、仕事が先だ。サキは欲望にうち勝った。そしてポケットから超能力者メモを取り出すとそれをながめた。1番マリーネ・ノザキ、住所ブラジル首都ブラジリア半島区付近。ブラジリアまで飛行機か、1時間で行ける。クラス長官のフリーパスポートなら、どこでも通用するわ。



コメント

<http://76519.diarynote.jp/>

りす

2006年12月22日 1:44

きゃ~~~~っ!!

キャ、らくた～、(※性格設定※) が~~~~っ!!!!

今と、全然!! 違うっ!! ★(◇;)(◇;)(◇;) ☆

奥付

奥付

リステラス星圏史略

古資料ファイル

7-5-1

「エスパッション、始動。」

(最終稿+没原稿)

../../book/112539

著者

霧樹里守 is 土岐真扉

as

遠野真谷人

著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ

../../book/112539

電子書籍プラットフォーム：パプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

リステラス星圏史略 古資料ファイル 7-5-1 「エスパッション、始動。」 (最終稿+没原稿)

著 霧樹 里守 (きりぎ・りす)

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
